

飛 騰

第2号



海 援 隊 旗

おかげ様で半年

館長 小 椋 克 己

おかげ様で、十万人のお客様にお越し頂き、それも県内はもとより北海道、東北など遠い県外からのお客様が足を運んで下さっていることを知り、感謝の日々でございます。

5月からは、坂本龍馬との関連性の薄い展示品を入替え、複製品や模型ではありますが「血染めの掛軸」「薩長同盟盟約裏書き」「龍馬の持っていた二種類のピストル」を展示、更に当館職員が足と筆で仕上げた「脱藩の道解説図」など暖かいタッチでお迎えしております。

6月1日には、運営審議会が組織され、初の会合を持ちました。それぞれの分野から選ばれたメンバーの方々から、数多くのご発言を頂きました。龍馬の考え方、行動力を継承する「龍馬への入り口」となること、分かりやすい資料の充実、友の会的な組織の整備などなど、期待

を込めての建設的なご意見で、運営の原動力とさせていただきます。

このほかご来館下さった方々のお声も、私どもにとって大きな励みでございます。

ここは「博物館」「資料館」ではなく『記念館』だという大きなコンセプトがあり、「建物のある風景」「建物のユニークな特長」「建物から見た眺め」とともに、「日本を今一度洗濯いたし申し候事にいたすべく」「シユラか極楽かに御供申す可しと存じ奉り候」など龍馬の手紙の抜粋を始め、土佐漆喰の円錐など、さまざまな展示の意味するものを感じ取って頂ければ幸いです。

当館最高の展示(?)「龍馬の見た太平洋」は、空と海と水平線しかない単純明解なモチーフですが、それぞれの持っている何千通りかの表情の組み合わせで、何万何十万通りもの絵を描いてくれます。それを見ていると、お客様と龍馬記念館との触れ合いについて、何かを示唆してくれている、と感じるのです。



坂本龍馬記念館展示物の一部模様替えについて

当館では、かねて寄贈されていたピストルの模型や、発注作製した「血染めの掛軸」、また実地調査に基づく「龍馬脱藩の道」等を展示するため、地下2階資料展示室の模様替えを、4月下旬から5月にかけて行いました。

このように坂本龍馬関連の資料が増えたことで、「見ごたえがあった」等の来館者のご感想をいただいております。

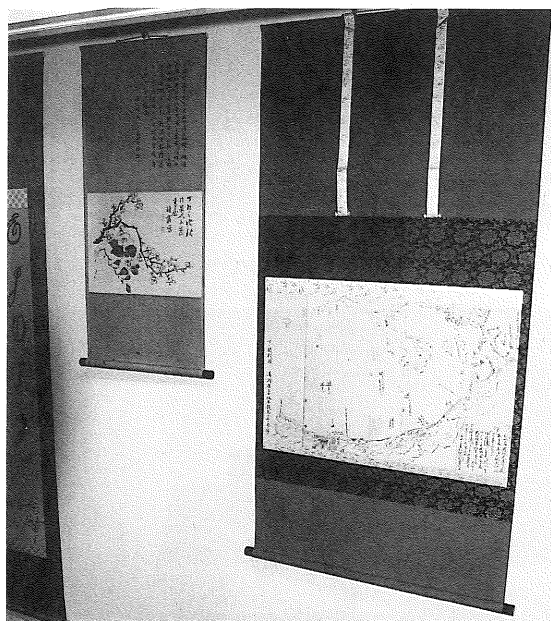
以下、新しい展示物をご紹介します。

1. 血染めの掛軸(複製)

真物は京都国立博物館所蔵。

これは慶応3年11月15日、京都近江屋で龍馬と中岡慎太郎が暗殺された時、その部屋にあった血しぶきを浴びた掛軸です。

この時、京都沢屋にいた長岡謙吉は、龍馬斬殺の急報を受けると、直ちに近江屋へ駆けつけ



▲ 左. 血染めの掛軸
右. 下関海戦図

ました。そして彼は、筆をとって掛軸の上部余白に、遭難の様と二人を悼む言葉を書き添えました。

2. 坂本龍馬朱筆による薩長同盟裏書き(複製) 真物は宮内庁書陵部所蔵。

これは慶応2年1月22日の薩長同盟成立に伴う、6か条の密約を記した桂小五郎から龍馬宛の書簡に、桂より求められて朱筆で書いた証明の裏書きです。

裏書きは2月5日に書かれ、翌6日、薩摩藩士村田新八、川村与十郎に托して桂へ返却されました。

これによって、桂の龍馬に対する信頼や慎重な彼の性格がうかがわれます。

3. 下関海戦図(複製)

真物は土佐山田町、秦親公氏所蔵。

慶応2年6月17日、龍馬は高杉晋作とともに乙丑丸いっちゅうまるに乗船し、長州側に立って幕府軍と戦いました。その時の模様を、土佐藩士溝淵広之丞とともに書いたうちの一枚です。

広之丞は嘉永6年3月、当時19歳の龍馬と同行して、江戸へ剣術修行に行った人です。

それ以後の両名の交流は不明ですが、慶応2年藩命で長崎へ来た広之丞は、龍馬との再会によって交流が復活します。龍馬は広之丞を長州の高杉晋作や桂小五郎に紹介したり、亀山社中の窮状や自分の心境を訴えたりします。

そうしたことが、翌3年の龍馬等の脱藩赦免や、亀山社中の海援隊への改編につながっていきます。

4. ジョン万次郎のアルファベット掛図(複製)

真物は県立歴史民俗資料館所蔵。

万次郎は漂流中、鳥島でアメリカの捕鯨船に救助され、ホイトフィールド船長の知遇を得て滞米すること10年。嘉永4年に帰国します。

翌5年(1852)8月土佐へ帰りますが、この書はその頃書いたものです。

5. 龍馬の肖像写真・湿版(複製)

武市祐雄氏より県に寄贈された真物は、県立歴史民俗資料館に所蔵されています。

桂浜の龍馬の銅像の原画となったこの肖像写真は、長らく上野彦馬の撮影と言われてきましたが、実は彼の弟子井上俊三(土佐)が撮じたもので、当時印画紙はなく、ガラスの湿板に焼き付けられたものです。

6. 坂本龍馬ゆかりのピストル①(模型)

龍馬が京都近江屋で遭難した時持っていたピストルは、後に甥の坂本直寛によって、北海道・浦臼での展覧会(明治37年)に出品されますが、この時の写真に収められているのが、スミス・アンド・ウェッソン第I型(22口径)です。

高知市・土生勇氏より当館に寄贈されました。

7. 坂本龍馬ゆかりのピストル②(模型)

慶応2年1月23日の寺田屋事件の時実際に使われ、その際紛失したのが、この32口径の第II型で、高杉晋作より贈られたものです。

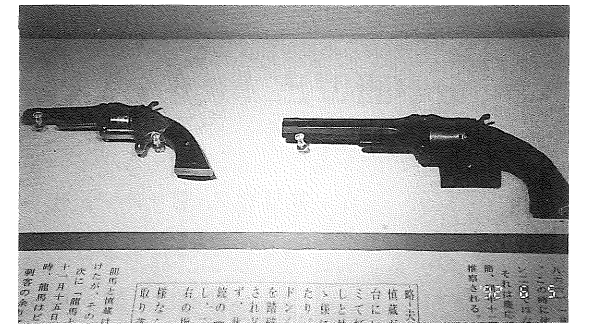
高知市・依光裕氏より当館に寄贈されました。

8. 龍馬脱藩の道をたどる解説図(自作資料)

龍馬28歳の文久2年3月24日、沢村惣之丞とともに脱藩。榑原ゆすはらの宮野々から那須俊平・信吾父子の案内で、葦ヶ峠あしがたけを越えて伊予国へ入り、その後、泉ヶ峠、宿間村、長浜、三田尻等を経て、4月1日下関に着きます。

この道は関雄之助(沢村惣之丞の変名)口供書(写し、高松小埜)が世間に出、村上恒夫氏や坂本美津子氏等の研究によって、その全貌が明らかになりました。

平成4年3月14・15日の両日、榑原町主催の「龍馬脱藩の道を訪ねて」の行事に下元が参加



▲ 左. スミス・アンド・ウェッソン第I型ピストルの模型
右. 同 第II型模型



▲ 「龍馬脱藩(文久2年)の道」解説資料(一部)し、その調査研究をもとに文書や写真等も取り入れ、平明に解説した資料です。

9. 坂本家々系図(自作資料)

来館者の関心も高いところから、従来の家系図に現存する人々をも書き加えました。

この家系図は、山本大著「坂本竜馬」、土居晴夫著「坂本龍馬とその一族」の巻末にある家系図を参考にして作りました。

10. 坂本龍馬と溝淵広之丞の肖像写真 2点

(土佐山田町・秦親公氏寄贈)

11. 扁額「體育者富強基」勝 海舟書

(東京・作家 宮地佐一郎氏寄贈)

12. 「坂本龍馬の肖像(油彩)」写真

(北海道 浦臼 村上寿雄氏寄贈)
(林竹治郎画伯の画、明治37年頃)

13. 龍馬の書簡 写真2点

(学芸専門員 下元正清)

【講演記録】

坂本龍馬と二十世紀

(1)

マリウス・B・ジャンセン

(プリンストン大学教授)

1991・11・14 於 高知

訳・町田宗鳳

記念事業というものは、さまざまな目的を持つイベントであると、しばしば言われます。それには、何よりも我々が一定の歴史的区分の中で共有する過去の思い出を掘り起こすことによって、過去と現在とをつなぎ合わせる働きがあると思います。また、過去というものを通じて、現在を未来へと繋ぎ合わせてくれます。なぜなら、我々が今日ここで記念しようとしている事柄は、まさしく我々が大切に保存し続けてゆくことによって、それを未来に実現しようとしている事柄にほかならないからであります。この様な意味において、坂本龍馬の記念事業は、日本の過去と現在の姿を映し出し、また日本が未来においていかにあるべきなのかということ、我々に反省する機会を与えてくれるのであります。

今年は特に、記念事業が盛んな年であります。西洋では、コロンブスの航海と新大陸のヨーロッパへの開放を記念して、その五百年祭が開催されています。今日の米国では、この行事に関して、さまざま意見がございます。つまり、ヨーロッパ人によるアメリカ大陸到達が、邪悪な行為や搾取と切り離せないものであると主張する人々の声があるかぎり、コロンブス到着以前に原住民が住んでいた大陸を新たに「発見」したことは、もはや言うことができなくなったからです。

それにまた、今年は真珠湾攻撃に始まり、広

島と長崎の破壊という形で幕を閉じた、あの太平洋戦争の開戦五十周年にもあたります。これらの記念行事の一つ一つが、我々がそこから何を学ぶべきなのか、そして何を未来に伝えて行くべきなのか、という問いを投げかけております。真珠湾攻撃は、明らかに多くの意味を包含しており、それをある種の政治家達が何らかの意図をもって利用しようとしていることは、疑いのない事実です。この龍馬記念館を政治的に利用するというのは、不可能でありましょうし、また断じてそうであってはなりません。しかしながら、ここで考えてみなくてはならないのは、いま坂本龍馬記念事業から、我々が何を学び取るかということであります。

私はこの講演のタイトルを「坂本龍馬と二十世紀」と名付けましたが、二十世紀はまもなく幕を閉じんとしております。今世紀は、太平洋戦争をはさんで、二分された激動の世紀でありました。今世紀において我々は、坂本龍馬をかって二度記念いたしました。記念式典というものは、それが開催された時代によって大きく左右されますし、英雄や事件といったものも、その時代によって大きく意味づけが変わって参ります。ですから、私は龍馬から、1991年に生きる私達が何を学び取るべきかという問いかけをする前に、まず先に、過去の世代が龍馬をどのように受けとめ見ていたのか、ということを考えてみたいと思います。

十九世紀において、つまり明治時代のことでありますが、龍馬は勇気と協調性という二つのものを持ち合わせていました。勇気の方は、言うまでもなく明白なものであります。土佐勤王党に加わり、国政に参画すべく土佐を脱藩した若き郷士として、郷里での処罰と幕府勢力からの危険という二つの事柄に、堂々と身を晒しました。



龍馬が勝海舟襲撃計画をもっていったことや、捕方に包囲された伏見の寺田屋から危うく逃れたということは、すでに時代劇でおなじみのストーリーであります。そして艦隊の長州

攻撃に興奮し、郷土の二男坊に過ぎないというその地位の低さからいって、大した望みも持たない高知での退屈な人生とは打って変わった激動の人生を、彼は喜び勇んで受け入れました。協調性ということにおいても、彼の才能には人と違った特別なものをもっておりました。龍馬は、勝海舟がその心中により遠大な計画を秘めていることを知るやいなや、たちまち一変して襲撃に來たはずのその本人を、護衛する側に回りました。そして龍馬は、海舟が設立した神戸海軍操練所に、自分のような青年達を集めて来るという仕事を与えられ、海舟の重要な助^{すけ}人となったのです。さらに海舟が支持勢力を失うや、薩摩と手を結ぶという道を切り開くため接触を重ねましたが、そのことが後日、彼の将来の長崎での活動基盤を形成するということになりました。

龍馬は海援隊の指導者として、薩摩と長州への食糧と武器の供給に奔走しました。

そうすることによって、木戸孝允や西郷隆盛と出会い、さらに薩長連合の基礎を作りました。また、勝から大久保一翁の列藩会議に関する提案のことを聞いていた彼は、船中八策を形成して、それが結局、徳川慶喜の大政奉還と明治政府設立の基盤になったわけでありました。

彼の勇気と冒険心が綿密な政治的手腕と混ざりあってきたからこそ、その人生における武士から政治家へ、あるいは浪人から老中への見事な転身が納得されるのであります。人格の成熟と相まって、彼の働きが明治政府と五箇条の御誓文へと直結して行ったわけでありました。

いったい坂本龍馬という人物以外の誰に、彼のこの役割が肩少わりできたでしょう。脱藩浪人だったが故に、郷里の官僚的保守勢力に邪魔されることなく、ある特別の目的を代表するために勤王の志士となった友人達にも恐れられることもなく、自由に振る舞うことができました。また、將軍慶喜に信頼を置かれていて、幕府と譜代的外様大名として特殊な関係を長く維持していた大名の山内容堂（豊信）にも、彼は土佐の人間だったがために接触することができたわけでありました。龍馬は土佐の人間として、薩摩藩や長州藩体制による新たな幕府の出現を恐れて、公議や共同責任体制といった考えに興味をもったりしました。郷土でありましたから、官僚的地位から来る脅威を周囲の者に対して与えることもなかったし、また実際に彼が政治的野心をもっていたという形跡もありません。

(以下、次号に続く)

入館状況

平成4・5・31現在（開館以来192日）

○総入館者数	93,470人
○最多入館 平成4・1・3	2,552ヶ
○最少入館 〃 3・12・17	72ヶ
○本年度最多入館 平成4・5・4	1,937ヶ
○本年度最少入館 平成4・5・22	182ヶ
○1日平均入館者数	469ヶ

拜啓 龍馬殿

●久し振りに帰ってきた土佐。

素晴らしい記念館がいき、私達に新しい時代を拓いてきた貴男の足跡を見せていただき、ありがとうございます。

又、土佐の変らぬ美しい海は、勇気を与えてくれるものです。

(3月21日 埼玉県 K・T 男性)

●私の兄は龍馬の“龍”をとって、竜次という名前です。父が龍馬の様な広い心の人物になってほしいという願いで、この名前をつけたそうです。

兄は歴史が好きで、特に坂本龍馬には興味がありました。それで別府からせっかくの機会なので、ココ記念館まで来ました。

兄は今、そこにあるTVに見入っている。

(4月5日 大分県 H・T 女性)

●坂本龍馬という歴史の中の人物が、この龍馬記念館に来て、少しずつわかってきた様な気がします。よい勉強ができました。

自分ももう少し世の中を考えて生きる様に心がけたい。今度は子供を連れて勉強しにきます。

(4月20日 宮崎県 H・S 女性)

●坂本龍馬という男は底知れない男だと思います。今の時代でも通用すると思える洞察力は、すごいものだと思います。

私は限りない龍馬ファンです。

(4月26日 茨城県 A・H 男性)

●大学で龍馬に興味をもち、研究論文をかこうと、ここへ来ました。何かを調べて、自分なりに龍馬を理解し、若い子どもたちに伝えるべきことを考えようと思います。

(4月29日 東京都 M・N 女性)

●時代を変えた大きな人と思っていたけど、すごく(ここに来て)親近感をおぼえました。この海を龍馬さんが見たのかと思うと、少しうれしかった。一略一龍馬さんの様な人になれたら(何かを変えられるような)と思います。

(4月30日 高知県 M・T 女性)

職員動静

解説補助員	岡林 智子	退職	4月30日付
同 上	木村 智砂	同	5月31日付
同 上	中山 ゆか	採用	4月1日付
同 上	村地 雅美	同	同
同 上	堀川 禮子	同	5月6日付

解説補助員 中山 ゆか

先輩方のご指導で、ゆとりを持って応対できるようになりました。今、龍馬を支えた女性達の事が気になっています。

同 上 村地 雅美

ガラス張りの建物が、遠くから見ても光に反射して、とても印象的。展示物も、龍馬のように少し「風変わり」。楽しい。

同 上 堀川 禮子

広大な海原、そして日替わりの景色。それは人の心の動きでもあり、又龍馬の優しさ、心の広さであると思います。



館だより “飛騰” 第2号

平成4年(1992)6月1日 発行
発行所 高知県坂本龍馬記念館
〒781-02 高知市浦戸城山830
Tel (0888) 41-0001